

「学校・家庭・地域の連携」活動における学習の機能

—子育て支援活動の NPO 団体を事例に—

伊藤 雅一

千葉大学大学院 人文社会科学研究所 博士後期課程

地域社会と教育を考える際、「学校・家庭・地域の連携」がより重要視されるようになってきた。その連携の 1 つとして子育て支援に関する活動に注目し、千葉市で活動をしている「NPO 法人ちば子ども学研究会」を事例として取り上げる。子育てに関する具体的な問題について「学習」することを軸にして活動している点を取り上げ、研究会の設立過程や、現在、研究会の運営会議として行われている井戸端会議でのやり取りを検討していく。研究会における学習は、子育て支援活動における負担を軽減したり読み替えたりする機能があり、研究会のメンバーたち自身が学んでいるのかを振り返ることで、研究会が学習を中心に構成されるよう調整されていることが見出された。考察を通して、「学校・家庭・地域の連携」に際して「学習」という観点の有用性を示した。

キーワード：地域社会と教育、子育て支援、NPO、生涯学習・社会教育、正統的周辺参加

1. はじめに

「地域社会と教育」というテーマにおいて、「学校・家庭・地域の連携」がより重要視されるようになってきた。それを象徴する一例は、2006 年に改正された教育基本法において、第十三条「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力を努めるものとする。」が新設されたことである。「学校・家庭・地域の連携」が法律として明文化されるに至ることは、連携に対する社会的な注目の高まりが背景にあることを示している。本稿では、連携の典型的な例として、子育て支援に関する活動を取り上げていく。

「学校・家庭・地域の連携」における子育て支援と言えば、学校職員や地域住民などの参加で運営される学校運営協議会を設置するコミュニティ・スクールに注目が集まっている。ただ、コミュニティ・スクールについて論じている佐藤晴雄は、学校運営協議会の担い手をどのように構成していくかがコミュニティ・スクールの課題だと指摘している（佐藤 2011）。その課題への対応策として、佐藤は「大人の学び」による担い手の確保と育成を挙げている（佐藤 2011:pp.71-72）。

他にも「学校・家庭・地域の連携」における子育て支援の文脈で、「大人の学び」について注目しているものとして阿比留久美の議論が挙げられる（阿比留 2011）。

阿比留は、地域／放課後子ども教室について論じる中で、保護者が子ども教室に「見守り」や「見学」としてゆるやかに参加していくことを取り上げている。このゆるやかな参加を「正統的周辺参加」¹であるとし、地域の子育て活動継続の担い手として巻き込んでいく流れを見出している（阿比留 2011:pp.126-127）。

佐藤も阿比留も子育て支援活動における「大人の学び」と活動の担い手とを関連させて議論をしている。その関連づけを学習論の知見から説明すると「正統的周辺参加」が援用できることが示されている。しかし、「正統的周辺参加」は、安定的な「実践コミュニティ」²によって、学習の正統性の保障と周辺性の領域設定がなされるため、安定的な「実践コミュニティ」が見出せない活動の説明には限界がある。阿比留もこの点には留意しており、旧来の地縁組織³から離れた NPO などの活動に注目していく必要があると述べている（阿比留 2011:p.129）。

本稿では、学習活動を軸にした子育て支援活動団体である「NPO 法人ちば子ども学研究会」（以下、研究会）について取り上げていく。研究会では、「大人が笑えば子どもも笑う」をモットーに、「子どもと一緒に楽しむことのできる大人を増やす事業」（子育て支援の担い手育成）を展開して「大人の学び」を中心に活動している。研究会の設立背景や、筆者が活動に参加した際の記録などを元に研究会における学習がどのように機能し構成されているのかを考察していく。考察の際には、「正統的周辺参加」の議論を援用しつつ、その限界についても言及する。考察を通して、「学校・家庭・地域の連携」のあり方の検討を目指す。

Masakazu ITO: Function of Learning in the “Collaboration among Schools, Families and Communities ” Activity: NPO for Child Care Support Activity as the Example Graduate School of Humanities and Social Sciences, Chiba University

2. 研究会の概要と調査方法

2.1. 研究会の概要

「NPO 法人ちば子ども学研究会」は、2002 年度に始まった千葉市と千葉大学の共同プロジェクトの一環として開設された「ちば子ども学講座」という市民向け講座に端を発している。地域での子育て活動に関わるリーダー育成を目指したこの講座の受講者が中心となり、任意団体として「ちば子ども学研究会」が立ち上げられた。その後、子育て支援に関する講座や研修を開催しつつ、活動を展開していく。近年では、2014 年に国際親善などに取り組む社会奉仕団体「千葉キワニスクラブ」⁴から第 31 回社会公益賞を受賞するなど、対外的にも注目が集まりつつある。ここでは、以下に年表を示すにとどめ、研究会の設立背景や主な活動については後に詳しく述べていく。

表 1 ちば子ども学研究会の活動履歴
(研究会の公式 HP をもとに筆者編集)

年度	主な活動
2002	10 月千葉市と千葉大学の共同プロジェクト「千葉子ども学研究」の一環として地域で子育て活動に関わるリーダーの育成を目指し講座が開催される。
2003	2002 年度の講座受講者が中心となり、千葉市轟公民館の全面的協力と千葉市生涯学習センターと千葉大学教育学部藤川大祐助教授（当時）の支援を得て「ちば子ども学講座 part2」を実施（以降、2011 年の part10 まで企画協力）。講座 part2 の受講者も加わって任意団体「ちば子ども学研究会」が発足。
2004	活動の幅を広げようと子ども向けイベントを 2 回実施。
2005	千葉市生涯学習センターの主催行事としてちば子ども学講座 part4 を開催。 千葉市教育委員会「子育てサポーター研修会」で地域子育て支援活動事例として発表する。
2006	千葉大学教育学部の授業とのタイアップ開始。 5 月から轟公民館の委託を受けて毎月 1 回、小学生対象の「子どもなんでも体験隊」開催開始。
2007	千葉市生涯学習センター主催の市民自主企画講座として、地域での子育てを考える講座（全 4 回）と親子向け遊びの講座（全 3 回）の 2 講座を開催。

2008	千葉市子ども会役員講習会で地域子育て支援活動の活動事例として発表。千葉市生涯学習センター市民自主企画講座を開催。
2009	第 50 回関東甲信越静公民館研究大会にて、千葉県での活動事例として発表を行なう。
2010	NPO 法人格取得の検討をはじめ、12 月 21 日に設立総会を開催し、NPO 法人の設立を決定。 3 月 8 日「NPO 法人ちば子ども学研究会」を設立登記する。
2011	「ちばの WA! 基金」の一步くん募金の助成を受け「子どもなんでも体験隊あそびレシピブック」を発行。千葉市教育委員会の協力により千葉市内全小学校の放課後教室に配布。 財団法人こども未来財団の子育て支援者向け研修事業に採択され 4 回連続講座を開催する。 大人が楽しく学ぶ講座「Mama's Cafe」開始。
2012	マンション居住者のためのコミュニティサポート運営事業を委託契約。 財団法人こども未来財団の子育て支援者向け研修事業に採択され 5 回連続講座を開催。 第 57 回千葉市社会教育功労者（団体）感謝状を受賞

2.2. 調査方法

本稿では、まず研究会に関する過去の資料として、研究会の公式ホームページや、顧問である藤川大祐が著したもの（藤川 2009）などを参考した上で、生涯学習・社会教育の領域における研究を参照して研究会の社会的位置づけや特徴について述べていく。

併せて、筆者が書いてきたフィールドノーツ⁵をもとに研究会における実際のやり取りについて取り上げていく。筆者は、2014 年度の千葉大学教育学部の授業「地域子育て支援実習」の枠に年間を通して参加してきた。その際、筆者は地域活動の研究をしており、研究会の活動に参加して研究にしていきたい旨を参加初日に述べている。フィールドノーツは研究会の活動に参加した際に記録したものである。

3. 研究会設立過程にみる研究会の位置

3.1. 社会的背景

先に挙げたとおり、研究会の発端は千葉市と千葉大学の共同による「ちば子ども学講座」である。この講座は、文部科学省の生涯学習まちづくり支援モデル事業「ちば子ども学研究」の一環として企画、実施された。研究会

の顧問を務める藤川大祐（2009）によると、「学校 5 日制導入に伴って地域で過ごすことが増える子どもたちに対して、関わって活動できる大人を養成することを目指して」（藤川 2009:p.2）という講座であったという。

学校週 5 日制導入を背景に、環境の変化する子どもに対するプログラムを行うのではなく、まずは大人の学びを入り口として展開していることは研究会の大きな特徴である。大人の学びは、生涯学習・社会教育の文脈でたびたび議論されてきた。今回の文脈で言えば、日本社会教育学会では、主に子どもの環境が変化する学校週 5 日制と、主に大人の環境が変化する週休二日制とを併せて議論をし、1冊にまとめている（日本社会教育学会編 1993）。生涯学習・社会教育の文脈における学校週 5 日制導入の早い段階から議論は、子ども／大人の環境を併せて議論することから、学校にまつわる制度導入と、子ども／大人の環境が同居する家庭との結びつきを連想させる。そして、学校と家庭を含み込んだ地域という視点も連想される。2002 年度から完全学校週 5 日制が開始されたことを受けて、佐藤一子は、学校週 5 日制によって学校外の生活の比重が増えることを指摘しつつ、「地域の教育力」について議論を展開している（佐藤 2002）。

以上より、研究会が成立していく過程には、「学校・家庭・地域の連携」を志向する機運が社会的背景としてあったと分かる。具体的に言えば、学校週 5 日制という制度的背景があったこと、議論の場としては生涯学習・社会教育という領域であることが指摘できる。

3.2. 学習する側としての出発

ただ、社会的背景として「学校・家庭・地域の連携」の機運があったとしても、その連携が容易に展開していくわけではない。特に、連携の場となる様々な活動の担い手がいること、更に言えば担い手が継続的にいることが大きな課題となっている。藤川も「責任感のある一部の人だけが、長期間、献身的に取り組んでいる」（藤川 2009:p.2）活動が目立つことを指摘しており、担い手問題によって活動が続かないことを懸念している。

そこで、その懸念を解消するために藤川は「学んだ成果を社会に還すというしくみ」を構想した。具体的には、「ちば子ども学講座」の内容を講師による講座と合わせて、子ども対象のイベント企画と実施も参加者に取り組んでもらうことにした。講座で学んだことをすぐに社会へ返す構成にしたのである。そして、連続講座の節目には藤川が講師として「学んだことを社会に還す」ことを強調して伝えたという⁶。

2002 年度の「ちば子ども学講座」を最後まで出席した参加者の多くは講座終了後も活動の継続を望んだ。そのため、意欲的な参加者を中心に「ちば子ども学研究会」

として活動が継続していく。ここでいう活動の継続とは、研究会の担い手が学び続けることに合わせて、学んでいることを社会に還し続けることも意味している。実際に、2003 年度から中心的な拠点となっている千葉市轟公民館における市民向け講座の企画・運営や、子ども向けイベントの開催などを展開している。

以上より、研究会のはじまりは講座という学習の機会であったことが分かる。ただ、その学習は「学んだことを社会に還す」という一連の流れを志向するものであった。研究会は、社会的な活動をする主体である以前に、担い手それぞれの学習活動の場なのである。次節で、具体的な活動内容を取り上げていく。

4. 研究会でのやり取りにおける学習

4.1. 研究会における学習や実践の内容

ここでは、研究会において現在も継続して行われている活動の中でも主要なもの 3 つについて説明していく。

(1) 子どもなんでも体験隊

子どもなんでも体験隊（以下、体験隊）は 2006 年からの取り組みで、今日まで継続している。轟公民館からの委託を受けて開始した企画で、それまでの学習を活かした様々な遊びを体験していく。体験隊は、小学生を対象に年間 8 回、日曜日午前 10 時～12 時を開催日としている。公民館から近隣の小学校へ告知と募集を行い、研究会によって企画・運営されている。

体験隊は、所属する学年や小学校の異なる児童が集まる機会となっている。また、体験隊の参加経験がある子どもを「キッズスタッフ」として受け入れている。

表 2 体験隊の年間予定
(2014 年の募集お知らせをもとに筆者作成)

回	年間予定	
1	5/11	新聞紙で遊ぼう
2	6/8	人形劇で楽しもう
3	7/13	フィンガーペイントに挑戦
4	9/7	新聞紙でトカゲをつくるよ
5	10/19	新聞紙でテントもつくるよ
6	11/9	ドキドキひみつの紙あそび①
7	11/30	ドキドキひみつの紙あそび②
8	12/14	最終回はお楽しみ会！

(2) 大学の授業とのタイアップ

2006 年度から千葉大学教育学部における授業「地域子育て支援実習」とタイアップを開始している。当初は生涯教育課程 2 年生以上を対象とした授業であったが、

2013年度からは、授業枠を「地域子育て支援活動実習 I」と「地域子育て支援活動実習 II」に分け、対象は生涯教育課程1年生以上に拡張された。受講者は、研究会の活動に参加することで、単位認定を受けることができる。ここでの参加とは、研究会の活動に「見習い」として参加することを指している。参加を通して、NPO活動への貢献による地域子育て支援のあり方を実践的に学ぶことが目的となっている。

おおまかには、体験隊当日の参加と、月2~3回の平日昼間に行われる体験隊の準備と振り返り、井戸端会議と呼ばれる研究会の運営会議への参加が日程として組まれている。

この授業を受講した学生は、体験隊を中心としつつ、子どもとのコミュニケーションを遊びから経験していく。また、NPOという組織運営や研究会のメンバーとのやり取りから生涯学習・社会教育の領域について考える機会となっている。

(3) マンション居住者のためのコミュニティサポート 運営事業の委託

2012年からマンションのコミュニティづくりを行うN&Sコミュニティアソシエイツという会社と契約し、千葉県内のマンションにおいて、コミュニティ形成を支援するイベントなどに取り組んでいる。具体的には、折り紙で遊ぶ会や、クリスマスのイベントを開催するなどして、親子や親どうしの交流の場を創出している。

藤川によれば、大規模なマンションが建設された後の課題の1つとして、マンションの住民どうして良好な関係を築いていくことが挙げられるという。その良好な関係のためを築く契機として、イベントの企画や運営を外部委託することが表れ始めたという社会的背景がある(藤川 2014:pp. 176-177)。

4.2. 体験隊の準備や振り返りでのやり取り

「地域子育て支援実習」を通して研究会を見ると、体験隊にまつわる活動が最も時間と労力を費やしているように見える。体験隊の準備では、子どもの体験する遊びを学生や研究会のメンバーが実際にやってみるところから始める。例えば、2014年7月13日の体験隊に向けての準備は、アイスブレイク(体験隊当日の最初に行うプログラム)を実際にやってみた。

○アイスブレイク体験

- ・サイレントゲーム (お題: 誕生日順に並ぶ)
- ・後出しじゃんけん
- ・古今東西ゲーム (お題: 生き物・野菜)

<2014. 7. 8 フィールドノーツより>

アイスブレイクは体験隊の導入なので、ほとんど道具を使わず、簡単に理解のできるルールのもが選ばれている。何気ないことではあるが、どのような流れで遊びを提供していくのかという視点が見出せる。

また、遊びのお題が適切かも実際にやりつつ確認していた。2014年7月13日の体験隊における中心的な内容はフィンガーペイントであったが、何の絵を描くのかというお題については準備の際に決めていた。

・模造紙10枚サイズの紙に大きな絵を描く
「お題は?」(アイスブレイクのグループで考える)
花畑、夏祭り、花火、海、山、川、人物(夏休みが近い)
B「子どもを大きく誘導するきっかけ」
(木の幹だけ描いておくなど)
(その場で描いて出していくか)
<2014. 7. 8 フィールドノーツより>

ここでは、フィンガーペイントによって、大きな絵を描く際に提示するお題について考えている。夏休みが近いという季節柄の考慮があるお題が目立つ。Bの発言は、お題をただ単に伝えるだけではなく、絵を描くに至る誘導が気になって出たものである。体験隊当日の子どもの動線にまで気を回している。

更にBは、絵のお題を考えるやり取りの中で以下のように語る。

B「フィンガーペイントの理念はグチャやネットリの体験」(絵の具と糊を混ぜる)
B「何か絵を完成させるわけではない」
<2014. 7. 8 フィールドノーツより>

ここでのBの発言は、「絵を完成」させることに注視する流れを一旦止めて、「フィンガーペイントの理念」を確認している。この「理念」は、ただの思いつきではなく、研究会のメンバーが学習した内容⁷に基づいている。体験隊にまつわる活動の中にも、「学んだことを社会に還す」ことが根付いていることが分かる。

最終的に大きな絵を描くお題は以下のように決まった。

最終的なお題

- ・花火、海、動物園(足跡はどうか)
 - ・山、おまつり、川、ジャングル
- 1回目: 花火と海 2回目: ジャングルと自由

<2014. 7. 8 フィールドノーツより>

絵を描く機会を2回に分け、お題のない自由創作の機

会も設定した。絵を描く「きっかけ」としては、学生があらかじめ用紙に花火の筒や中心点を描く、海らしい線を描くなどすることとなった。

なお、学生たちは、授業を通して以下のようにふりかえりを語っていた。

「子どもが苦手だったけどかわいく見えた」
 「実際に接してみないと分からないこともあった」
 「なかなか取り組まない子ども」「ケンカとか」（が実際に見れた）
 <2014.10.7 フィールドノーツより>

・企画を立てることの難しさ、その一方での子どもとふれあいへの慣れ
 ・「お母さん達の話し合い」が興味深かった
 <2015.1.27 フィールドノーツより>

4.3. 井戸端会議でのやり取り

前項までの研究会における活動内容を見ると、研究会のメンバー自身の学習する機会がないように思えるかもしれない。実際に、研究会のメンバーのやり取りにもそのことが語られている。

井戸端会議では、研究会のメンバーがそれぞれ担当した活動の報告を行い、情報を共有する場であることが基本となっている。ただ、運営会議として、現状の課題や将来的な課題についてのやり取りが盛んに行われる場でもある。筆者が参加していて最も印象的だったのが、体験隊の継続を考えるやり取りであった。

○今後の体験隊について
 A「やるかやらないか」（二択）
 →自分「折衷案とかないんでしょうか？」
 「公民館という基盤を活かせないのか」
 <2014.11.18 フィールドノーツより>

ここでは、来年度（2015年度）以降の体験隊について、Aは体験隊の継続／終了の二択で意見を求めていた。しばらく間が空き、意見が出ないようだったので、筆者（「自分」）が二択以外の選択肢はないのか尋ねている。すると、体験隊に対する気持ちが語りに出てきた。

C「いつも来てくれる子どもの成長を見るのは嬉しい」
 C「それで（やるかやらないか）引っかかる」
 （負担は大変だが、やりがいがある）
 <2014.11.18 フィールドノーツより>

比較的長く続けてきた企画が体験隊であることもあ

り、体験隊に「やりがい」を見出しつつも継続の難しさがあるようだ。この後、主催を変えると運営はどうなるのか等の話し合いが進んでいくと、「引っかかる」ことが何であるのかが分かってきた。

「（自分の）子どものいた頃は良かった」
 「貴重な日曜日を使っている」（ボランティアという問題）
 「毎年やってるから、という流れに疑問がある」
 <中略>
 「当初は地域で子どもを育てるといふ共有があった」
 <2014.11.18 フィールドノーツより>

研究会のメンバーは、自分の子どもが体験隊に参加していた人が少ない。当初は自分の子どもが研究会の企画に参加していたが、研究会の活動を続けていくうちに子どもが中学生・高校生へと移行していくと、自分の子どもが参加しない研究会の活動に専念することになる。「貴重な日曜日」は自分の子どもを含めた各家庭の時間を割くことであり、また仕事をしているメンバーにとっては休日が減ることを意味する。

体験隊について言えば、長く続けてきた分の「やりがい」や愛着がある一方、「毎年やってるから」という続けることが目的化していることに違和感が生じているようだ。「当初」をふりかえると、「地域で子どもを育てる」といふ理念の「共有」があったことを語っている。

理念の話からは、段々と話が大きくなっていき、研究会のあり方について話し合われたりしていた。そのうちに、話は学習へと落ち着いていく。

「インプットしたい」（アウトプットにひと区切りか？）
 <中略>
 A「単発でやることはいくらでもある」
 <中略>
 「大人の学びを促すことが本来やりたいこと」
 D「場があれば親を引き出せる」
 <2014.11.18 フィールドノーツより>

研究会としての活動を展開してきた一方、その多くは「アウトプット」であり、研究会のメンバーが望む学習する機会が減ってきていることに気づいたようである。更に、自分たちのみが学習していくのではなく、「大人の学び」として促していくことをしていきたいと語られた。特に子育て支援に明るい研究会は「親」をどのように「大人の学び」の場へと引き出してくるかを考えていく。

以上の流れを受けて、2015年度の体験隊は、回数を

減らしつつ、親子での参加募集を募ろうと準備を進めている。

5. 考察～学習の観点からみる研究会

これまでの議論を受けて、研究会について学習という観点から考察していく。まず、研究会のはじまりは講座という学習の機会であったことが指摘できる。ただ、その学習は「学んだことを社会に還す」ことに重きを置いたもので、研究会は、社会的な活動をする主体である以前に、担い手それぞれの学習活動の場であるが特徴的と言える。

実際に研究会の活動を細かく見ていくと、これまでの学習内容がふりかえられ、「社会に還す」活動へ接続していることが体験隊のやり取りに表れていた。ただ、筆者の関わった時期は、ちょうど「社会に還す」活動を見直しつつ、研究会のメンバーが十分に学習する機会を得られていないのではないかと問われ、体制の見直しをしている時期であった。

学習という観点から述べれば、研究会のメンバーたちが学習内容をふりかえることで活動内容が理念や目的に合っているかを確認・調整していたと考えられる。また、研究会のメンバーたち自身が学んでいるのかをふりかえることで、研究会が学習を中心に構成されるよう調整されていることが見出された。別の言い方をすれば、研究会のメンバーの学習活動が不十分だと、研究会の活動は負担として表出するが、学習活動に取り組めていれば負担はある程度解消されるとも言えるだろう。

生涯学習・社会教育の領域から研究会の学習を考察すれば、「大人の学び」によって子育て支援活動の担い手が生まれてきたのが研究会であると言える。研究会という「実践コミュニティ」が、大人向け講座や子ども向けイベントを提供することで、周辺的に関わりつつ正統な学習をする機会を外に広げ、子育て支援活動へと巻き込んでいく。

ただ、「正統的周辺参加」という学習論は、学習の正統性をどのように担保するのかという課題があると言われている(松岡 2012:pp.288-289)。それに関連して、研究会が学習の正統性を担保できるような安定的な「実践コミュニティ」であるのかも問われている。

その課題について研究会の場合は、メンバーが学習活動を継続していくことである程度担保していると考えられるのではないだろうか。「実践コミュニティ」を構成する「熟練者」がいるのではなく、「学習コミュニティ」を構成する「学習者」がシンボリックに「熟練者」として機能していると考えられる。つまり、「正統的周辺参加」が想定する「熟練者」は研究会には存在しない。

これを NPO の水平的な人間関係から言い換えれば、研究会の誰もが「学習者」になりうる(「熟練者」として機能しうる)ということになる。そして、「学習者」が学習をしていくことで学習の正統性を担保していく(正統性を外部のコミュニティから調達してくる)のではないだろうか。

「正統的周辺参加」によって研究会を説明するには限界があるが、「熟練者」の機能を果たすシンボル(「学習者」)を想定することで、学習の正統性を自前で担保する構図を描けると考えられる。学習を中心に構成する団体によって学習の正統性を担保していれば、「学校・家庭・地域の連携」を具体化していく有力な手立ての1つとして展開していけるかもしれない。

6. 結論と課題

研究会が成立していく過程には、「学校・家庭・地域の連携」を志向する機運が社会的背景としてあった。研究会の活動は即時的に子育てに関する問題を解決はしないが、具体的な問題に対して、間接的な解決の手立ての提示や、様々な負担を引き受けられる範囲に収める活動として、学習活動が機能していると考えられる。

学習は、具体的な問題を把握しようとする行為であり、問題が解決されるとは限らないが、解決への道筋を構成していく。また、学習は知識や経験などを得るという意味で負担として解釈されにくいと考えられる。研究会における学習から、子育て支援活動における負担を軽減したり読み替えたりする機能が見出せる。

本稿によって、「学校・家庭・地域の連携」に際して「学習」という観点の有用性がある程度示せたと考える。もう少し言えば、学習の求心性から社会的な連携の可能性を見出すことに貢献したのではないだろうか。

本稿の課題は、子育て支援活動の当事者もつ認識については直接確認しなかったことが挙げられる。本稿の議論について、今後、インタビュー調査などと併せて考察する必要がある。次稿の課題としたい。

¹ 「正統的周辺参加」とは、レイヴとウエンガーが提唱した「状況に埋め込まれた学習」理論を構成する要素の1つである。徒弟制から着想を得た学習論で、開かれた「実践コミュニティ」へ周辺的に参加することで正統な学習をしていく (Lave & Wenger 1991=1993)。

² 本稿では、'community of practice' の訳を「実践共同体」ではなく「実践コミュニティ」として表記していく。先行研究では柳沢 (2008) などに同様の表記が見られる。この表記を採用した意図としては、国内外で盛んなコミュニティ論との関連を意図していることが挙げられる。海外のコミュニティ論を網羅的に概観しているものとして、デランティ (2002=2006) が挙げられる。

³ 阿比留は久田邦明の地域共同体に関する議論 (久田 2010: pp.23-25) に言及している。久田によれば、地域共同体の崩壊

が進行した後も、地域共同体があったことの記憶によって1980年代までは地域社会が維持されていたと言う。だが、核家族第二世代が保護者になっていく1990年代以降は、地域社会の解体が進行していると論じている。つまり、旧来からの地域共同体を安定的な「実践コミュニティ」として見出せる社会的背景ではないことがうかがえる。

4 キワニスクラブは、ロータリークラブ、ライオンズクラブと並ぶ世界三大社会奉仕団体の1つである。千葉は日本地区に31あるうちの1つの拠点である。

5 本稿で引用しているフィールドノーツの表記は基本的に原文のままである。「」は会話の記録であり、話者の分かるものはA,B,C・・・で表記し、同一話者が分かるようにしている。A,B,C・・・は全て研究会のメンバーを指している。()は、フィールドノーツを書いた際に付けた補足説明であり、本稿執筆の際に追加したものではない。それに対して、< >は本稿において追加したものである。

6 藤川(2009)によれば、2007年度の「ちば子ども学講座」の初回レジュメは以下の内容になっているという。

1 子どもにとって大変な時代？

- ・45歳以下は個人主義の世代、「社会のため」「子どものため」という意識が希薄に
- ・地域社会の崩壊、親・教師以外の大人と接したことがない若者
- ・承認の供給不足、低い自己肯定感
- ・変化の激しい時代、有名大学を出ても就職は大変
- ・高度情報社会は、子どもにとって「受け身社会」

2 子どもが育つのに必要なこと

- ・「社会に貢献できる立派な大人」を目指そう
- ・体力をつけるのも、知的能力をつけるのも、「立派な大人」になるために必要なこと
- ・話を聴くこと、見守ること、自立させること
- ・「メディア漬け」の最大の問題は、他の時間が奪われること
- ・さまざまな大人、おにいさん・おねえさんに、接する機会をつくる
- ・子育ては一人ではできない

3 教えるとは？

- ・「何を教えるか」ではなく「(子どもが)何を体験するか」が重要(子どもには「脈絡」)
- ・「向き合う関係」と「寄り添う関係」
- ・教えることは、ジレンマの連続(完璧な教育などない)
- ・結果はすぐに出ない(100回くらい繰り返して、ようやく成長する)
- ・学ぶとは「真似ぶ」こと(教える側は常に手本)
- ・10学んで1教える
- ・手順は身体化し、実践では子どもだけを見つめる

4 実践づくりのポイント

- ・一人一人の「違い」を活かして協力させる(教える側も「違い」を活かす)
- ・子どもたちの「承認欲求」(認められたいという欲求)に応える
- ・教えるより、じっくりつきあってあげる
- ・ほめればよいというものではない(「面白い」と思えることは大切)
- ・罪を憎んで人を憎まず
- ・わからないときは取り繕わず、きちんと考え、必要なら知っている人に尋ねる
- ・「時間通り」は無理、後半で時間調整できるような準備を
- ・緊張するのは当然、緊張してもできるような準備を
- ・挨拶、笑顔、安全確保、約束を守る、通る声で話す等は、やはり重要
- ・学ぶことは一人ではできない→学んだことを社会に還元しよう

7 学習した内容については、2011年度に研究会が発行した「子どもなんでも体験隊あそびレシビブック」としてまとめられている。

参考文献

- 阿比留久美(2011)「学校と地域の連携」をすすめるデザイン」日本社会教育学会編『学校・家庭・地域の連携と社会教育』東洋館出版社。
- Delanty, Gerard, 2002, *Community*: Routledge (=山之内靖、伊藤茂訳 2006『コミュニティ グローバル化と社会理論の変容』NTT出版)。
- 藤川大祐(2009)「教育による現代的な社会問題の解決—実践開発の観点からの考察—」千葉大学教育学部授業実践開発研究室編集発行『授業実践開発研究』。
- (2014)『授業づくりエンタテインメント!—メディアの手法を活かした15の冒険—』学事出版。
- 久田邦明(2010)『生涯学習論—大人のための教育入門—』現代書館。
- Lave, Jean and Wenger, Etienne, 1991, *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*: Cambridge University Press. (=佐伯胖訳 1993『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』産業図書)。
- 松岡広路(2012)「状況に埋め込まれた学習」社会教育・生涯学習辞典編集委員会編『社会教育・生涯学習辞典』朝倉書店。
- NPO法人ちば子ども学研究会編集発行(2011)『子どもなんでも体験隊あそびレシビブック』。
- 日本社会教育学会編(1993)『週休二日制・学校週五日制と社会教育』東洋館出版社。
- 佐藤一子(2002)『子どもが育つ地域社会 学校五日制と大人・子どもの共同』東京大学出版会。
- 佐藤晴雄(2011)「地域ガバナンスから見たコミュニティ・スクールの意義と課題—大人の学びの過程に着目して—」日本社会教育学会編『学校・家庭・地域の連携と社会教育』東洋館出版社。
- 柳沢昌一(2008)「社会教育実践研究の現在」『教育学研究』第75巻4号, pp.51-58。

教育基本法

http://www.mext.go.jp/b_menu/houan/kakutei/06121913/06121913/001.pdf

NPO法人ちば子ども学研究会 公式ホームページ

<http://chibakodomogaku.main.jp/about/>

国際キワニス日本地区

<http://www.japankiwanis.or.jp/>

(* URL は全て 2015年3月11日確認)